



TITLE:

ある同変微分同型群の完全性について (同変ホモトピー論)

AUTHOR(S):

阿部, 孝順

CITATION:

阿部, 孝順. ある同変微分同型群の完全性について (同変ホモトピー論). 数理解析研究所講究録 1978, 319: 1-8

ISSUE DATE:

1978-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/103996>

RIGHT:

ある同変微分同型群の完全性について

信州大 教養 阿部孝順

§1 序

J. Mather [3] と W. Thurston [5] に より 境界ともたない C^∞ 多様体に対して, $\text{Diff}^r(M)_0$ をコンパクトな C^r イソトピーにより M の恒等写像 1_M とイソトピーな微分同型のつくる群とすると $\text{Diff}^r(M)_0$ は完全である; 即ちその交換子群と一致することを証明~~も~~^す。但しイソトピー H_t がコンパクトな C^r 写像 $H_t: M \rightarrow M$ を満たすならば, M のコンパクト部分集合 K が存在して, $H_t(x) = x$ ($\forall x \in M - K, 0 \leq t \leq 1$), のことであるとする。ここでは, コンパクトリー群 G が M に自由かつ作用している場合に同様の問題を考えることにする。

M を境界ともたない m 次元 C^∞ 多様体とし, コンパクトリー群 G が M に自由かつ作用しているとする。 $\text{Diff}_G^r(M)_0$ をコンパクトな C^r イソトピーにより 1_M と G -イソトピーな M の同変 C^r 微分同型のつくる群とすると

次のことが証明できる。

定理 $1 \leq r \leq \infty$, $r \neq m-q+1$, $m-q \geq 1$ ならば $\text{Diff}_G^r(M)_0$ は完全である。但し $q = \dim G$ 。

($G = T^2$ のときは, A. Banyaga [2] の結果である)

なおこれは、福井和彦氏との共同の仕事である。

§2 準備

$K \subset M$ のコンパクト部分集合とし, $\text{Diff}_{G,K}^r(M)_0 \subset K \subset M$ も $\text{Diff}_G^r(M)_0$ の元で K を含む同変 C^r イソトピーにより 1_M とイソトピックなもの全体の群で, C^r 位相を入れておく。次の補題は任意の G -多様体に対しても成り立つ。

補題 1 (c.f. Palais, Smale [4] Lemma 3.1)

$\{V_i\} (i=1, \dots, n) \subset M$ の有限開被覆とする。 $N \in \text{Diff}_{G,K}^r(M)_0$ が 1_M の近傍とする。このとき次の条件を満たす 1_M の近傍 $N_0 \subset N$ が存在する: $\forall f \in N_0$ に対して $\exists f_i \in N (i=1, \dots, n)$:

- a) f_i は $V_i \cap K$ に含まれる同変 C^r イソトピーにより 1_M と G -イソトピック
- b) $f = f_n \circ f_{n-1} \circ \dots \circ f_1$

$\text{Diff}_G^r(M)_0 = \bigcup_{K \text{ compact}} \text{Diff}_{G,K}^r(M)_0$ であるから、補題 1 を用いると次のことが証明される。

系 2 $\mathbb{R}^{m+q} \times G$ を自然に G を右から作用させて G -多様体と看做すると、 $\text{Diff}_G^r(\mathbb{R}^{m+q} \times G)$ が完全なことが証明される。と、 $\text{Diff}_G^r(M)$ も完全なことが証明される。

系 2 より定理の証明は局所的な問題に還元される。 $U = \mathbb{R}^{m+q}$, $\pi: U \times G \rightarrow U$ を自然な射影とする。 $P: \text{Diff}_G^r(U \times G)_0 \rightarrow \text{Diff}^r(U)_0$ を $P(h)(x) = \pi(h(x, 1))$ ($h \in \text{Diff}_G^r(U \times G)_0$, $x \in U$) とする。このとき $1 \rightarrow \text{Ker } P \rightarrow \text{Diff}_G^r(U \times G)_0 \rightarrow \text{Diff}^r(U)_0 \rightarrow 1$ は群の完全列である。 G_0 は群 G の単位元の連結成分とする。 $f: U \rightarrow G_0$ に対して $\text{supp } f = \overline{f^{-1}(G_0 - \{1\})}$ とする。 $C^r(U, G_0)_0 \equiv \{f: U \rightarrow G_0 \mid f \text{ 字像; } f \text{ はコンパクトなる } U \text{ 上の } C^r \text{ 写像で零字像とサポート } \}$ として C^r 位相を入れる。

補題 3 $L: \text{Ker } P \rightarrow C^r(U, G_0)_0$ を次の式を満たすように定義する: $h(x, 1) = (x, L(h)(x))$, $h \in \text{Ker } P$, $x \in U$. このとき L は群の同型写像である。

次の補題は定理を証明するに必要である。

補題 4 $\delta > 0$, B_δ は 0 を中心とする \mathbb{R}^n における半径 δ の開円板とする。 $u: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ ($n \geq 1$) は零字像に C^1 位相で十分近い C^r 関数で B_δ から ϵ 以上離れているとする。 ϵ

α と ε C^∞ 関数 $v: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$; $\text{supp}(v) \subset B_{\delta'} (\delta' = 2\sqrt{3}\delta)$,
 $|v(x)| \leq 3\delta \quad (x \in \mathbb{R}^n)$ と B_δ に ε もつ C^r イソトピー $(\varepsilon, 1_{\mathbb{R}^n})$
 と イソトピー φ は C^r 微分同型 $\varphi: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n$ が存在して u
 $= v \circ \varphi - v$ である。

[証明] $\varphi: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n$ と $\varphi(x_1, \dots, x_n) = (x_1 + u(x), x_2, \dots, x_n)$
 と定義すると級数より u は 0 の近傍で C^r 微分同型で
 ある。 $\varphi_t: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n \quad (0 \leq t \leq 1)$ と $\varphi_t(x_1, \dots, x_n) = (x_1 + t u(x),$
 $x_2, \dots, x_n)$ と定義すると φ_t は B_δ に ε もつ イソトピーで
 $\varphi_0 = 1_{\mathbb{R}^n}$, $\varphi_1 = \varphi$ 。 $\xi: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ と $\xi(x) = x \quad (|x| \leq 2\delta)$,
 $|\xi(x)| \leq 3\delta \quad (2\delta \leq |x| \leq 3\delta)$, $\xi(x) = 0 \quad (|x| \geq 3\delta)$ とする。

$\mu: \mathbb{R}^{n-1} \rightarrow \mathbb{R}$ と $\mu(x_1, \dots, x_{n-1}) = 1 \quad (x_1^2 + \dots + x_{n-1}^2 \leq \delta^2)$, $\mu(x_1,$
 $\dots, x_{n-1}) = 0 \quad (x_1^2 + \dots + x_{n-1}^2 \geq 3\delta^2)$, $|\mu(x)| \leq 1 \quad (x \in \mathbb{R}^{n-1})$ と
 みる C^∞ 関数とする。 $v: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ と $v(x_1, \dots, x_n) = \xi(x_1)$
 $\cdot \mu(x_2, \dots, x_n)$ とすると v は $B_{\delta'}$ に ε もつ C^∞ 関数で $u =$
 $v \circ \varphi - v$ である。

註: A Banyaga は [1] で上の補題を $u: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m \quad (n, m$
 $\geq 1)$ に対して示しているが、証明が正しい。

$L(G_0)$ は G_0 のリー環とし $\{X_1, \dots, X_q\} \in L(G_0)$ の基底とする。
 $\Phi: L(G_0) \rightarrow G_0$ と $\Phi(\sum_{i=1}^q a_i X_i) = (\exp a_1 X_1) \cdots (\exp a_q X_q)$ とす
 ると Φ は 0 の ε -近傍 V に微分同型である。 $W = \Phi(V)$ と

おくと W は 1 の近傍である. $e: U \rightarrow W$ ε $e(x) = 1$ ($\forall x \in U$)
 とすると次の補題が成立する。

補題 5 $f: U \rightarrow W$ ε C^r 写像で $\text{supp } f$ が U におけるある δ -円板 ($3\delta < \varepsilon$) に含まれかつ C^1 位相で εK 付近のものとする。このとき $f_i \in C^r(U, G_0)$, $\varphi_i \in \text{Diff}^r(U)$ が存在し ($i=1, \dots, n$), $f = (f_1^{-1} \circ (f_1 \circ \varphi_1)) \cdots (f_q^{-1} \circ (f_q \circ \varphi_q))$ ε M_K である。

[言証明] $\tilde{f} = \Phi^{-1} \circ f$ とおくと C^r 写像 $a_i: U \rightarrow \mathbb{R}$, $i=1, \dots, q$, が存在して $\tilde{f}(x) = a_1(x)X_1 + \cdots + a_q(x)X_q$ ($x \in U$) とみれる。補題4より, C^r 写像 $v_i: U \rightarrow \mathbb{R}$; $\text{supp } v_i$ はコンパクトで $|v_i(x)| \leq 3\delta$ ($x \in U$) と $\varphi_i \in \text{Diff}^r(U)$ ($i=1, \dots, q$) が存在して $a_i = v_i \circ \varphi_i - v_i$ とみれる。 $f_i: U \rightarrow W$ ε $f_i(x) = \exp(v_i(x)X_i)$ ($x \in U$) とすると f_i はコンパクトな区間を C^r 写像で ε $f_i \in C^r(U, G_0)$ 。 ε $f(x) = (f_1(x)^{-1} \cdot f_1(\varphi_1(x))) \cdots (f_q(x)^{-1} \cdot f_q(\varphi_q(x)))$ ($x \in U$) とみれる。

$\varphi \in \text{Diff}^r(U)$ 。 K に対し $\tilde{\varphi} \in \text{Diff}_0^r(U \times G)$ ε $\tilde{\varphi}(x, g) = (\varphi(x), g)$, $x \in U, g \in G$ と定義する

補題 6 $h \in \text{Ker } P$, $f = L(h)$ とする。 $\varphi \in \text{Diff}^r(U)$ 。 K に対し $L(h^{-1} \circ \varphi^{-1} \circ h \circ \varphi) = f^{-1} \cdot (f \circ \varphi)$ とみれる。

§3 定理の証明と系

命題7 $\text{Ker } P = [\text{Ker } P, \text{Diff}^r(U \times G)_0]$

[証明] $\text{Ker } P_0 \ni h$ に対して $f = L(h)$ とおくと補題1と同様の証明により f は次のように表わすことができる: $\exists f_i: U \rightarrow W$ C^r 写像, $i=1, \dots, l$, $\text{supp } f_i$ は U のある δ -円板に含まれかつ f_i は C^2 写像で ϵ に十分近く $f = f_l \circ f_{l-1} \circ \dots \circ f_1$ と表わす。従って f は補題5で表わした f_i の積で表わせる。従って補題5より $\exists f_{ij} \in C^r(U, G_i), \exists \varphi_{ij} \in \text{Diff}^r(U)$, ($i=1, \dots, l, j=1, \dots, q$) で $f_i = (f_{i1}^{-1} \circ (f_{i1} \circ \varphi_{i1})) \circ \dots \circ (f_{iq}^{-1} \circ (f_{iq} \circ \varphi_{iq}))$ と表わす。
 補題3より $L(h_{ij}) = f_{ij}$ と表わした $h_{ij} \in \text{Ker } P$ が存在する。
 補題6より $L(h) = f = ((f_{11}^{-1} \circ (f_{11} \circ \varphi_{11})) \circ (f_{12}^{-1} \circ (f_{12} \circ \varphi_{12})) \circ \dots \circ (f_{1q}^{-1} \circ (f_{1q} \circ \varphi_{1q}))) \circ \dots \circ ((f_{l1}^{-1} \circ (f_{l1} \circ \varphi_{l1})) \circ (f_{l2}^{-1} \circ (f_{l2} \circ \varphi_{l2})) \circ \dots \circ (f_{lq}^{-1} \circ (f_{lq} \circ \varphi_{lq}))) = L((h_{11}^{-1} \circ \tilde{\varphi}_{11}^{-1} \circ h_{11} \circ \tilde{\varphi}_{11}) \circ (\tilde{h}_{12}^{-1} \circ \tilde{\varphi}_{12}^{-1} \circ h_{12} \circ \tilde{\varphi}_{12}) \circ \dots \circ (h_{1q}^{-1} \circ \tilde{\varphi}_{1q}^{-1} \circ h_{1q} \circ \tilde{\varphi}_{1q})) \circ \dots \circ (h_{lq}^{-1} \circ \tilde{\varphi}_{lq}^{-1} \circ h_{lq} \circ \tilde{\varphi}_{lq}))$ 。 L は同型写像だから $h \in [\text{Ker } P, \text{Diff}_G^r(U \times G)_0]$ 。

定理の証明 系2より $M = U \times G$ のとき $H_1(\text{Diff}_G^r(U \times G)_0) = 0$ を示せばよい。 $1 \rightarrow \text{Ker } P \rightarrow \text{Diff}_G^r(U \times G)_0 \rightarrow \text{Diff}^r(U)_0 \rightarrow 1$ は群の完全列だから $\text{Ker } P / [\text{Ker } P, \text{Diff}_G^r(U \times G)_0] \rightarrow H_1(\text{Diff}_G^r(U \times G)_0) \rightarrow H_1(\text{Diff}^r(U)_0) \rightarrow 0$ は完全列である。 J. Mather [3] と W. Thurston [5] より $H_1(\text{Diff}^r(U)_0) = 0$ であるから, 命題7より $H_1(\text{Diff}_G^r(U \times G)_0) = 0$ 。

系 M を境界をもたない可微分な m 次元 G -多様体で、 $\dim M \geq 1$ の軌道型をもつとする。 $1 \leq r \leq \infty$, $r \neq \dim M_G + 1$, $\dim M_G \geq 1$ をみたすならば $\text{Diff}_G^r(M)_0$ は完全である。

[証明] H を M の一点の等化部分群とし $N(H)$ を H の G に
おける正規化群とする。 $M^H = \{x \in M; h \cdot x = x (\forall h \in H)\}$ と
おく。 このとき $\text{Diff}_G^r(M)_0$ は群として $\text{Diff}_{N(H)}^r(M^H)_0$ と同型
である。 M^H は自由な $N(H)/H$ -多様体だから、定理より $\text{Diff}_{N(H)}^r(M^H)_0$
(M^H) は完全である。

参考文献

- [1] A. Banyaga : On the structure of the group of
equivariant diffeomorphisms, *Topology* 16, 279-283 (1977)
- [2] A. Banyaga : Sur les groupe des automorphismes d'un
 T^n -fibré principal. *C.R. Acad. Paris*, 284,
Série A 619-622 (1977)
- [3] J. N. Mather : Commutators of diffeomorphisms I and
II. *Comment. Math. Helv.*, 49, 512-528 (1974)
and 50, 33-40 (1975)
- [4] J. Palis and S. Smale : Structural stability theorems.
Global Analysis (Symp. Pure. Math. XIV) Amer.
Math. Soc., Providence, R.I., 223-231 (1970).

[5] W. Thurston : Foliations and group of diffeomorphisms,
Bull. Amer. Math. Soc., 80, 304-307 (1974)